# 第３学年　国語科学習指導案

３年４組　男子 22 名　女子 18 名　計 40 名
指　導　者　　丹保　芽久美
【授　業】９：00～９：50　会場　３年４組（４階）
【協議会】10：05～11：15　会場　３年３組（４階）

**１　単元名**　　言葉と解釈の深まりに着目して詩を味わおう
－「初恋」の改変の謎を通して－

**２　単元について**

**（１）単元設定の趣旨**

島崎藤村の「初恋」は、日本の近代詩の出発点となった叙情詩の名作として中学３年国語教科書に広く採録されている定番教材である。初出は明治 29 年の『文学界』10 月号であり、その際は、「こひぐさ」の小題で複数の詩とともに発表された。翌明治 30 年８月には『若菜集』に独立した詩として収められた。文語定型詩としての破綻のない七五調や同語の反復、選りすぐられた簡潔で無駄のない語の連鎖が、流麗なリズムを生み出す。それによって、声に出して読むことを通して日本語の調子や音の響きの美しさ、楽しさを感じられる詩でもある。

四連からなるこの詩は、一般的な指導書等では、「第一連：出会い、第二連：恋の芽生え、第三連：恋の成就、第四連：恋の深まり」という起承転結の純愛物語として整理されることが多い。「林檎畠」で出会って思いを寄せ合う「われ」と「君」との恋が、連を追うごとに進展し、やがて二人の恋は成就する。第四連ではその二人のやりとりから、いっそう互いの恋心の高まりが感じられる。幼いがゆえに純真に燃え上がる初恋の様が物語のように鮮やかに描かれる詩である。しかし、第一連を出会いとするとなぜ「あげ初めし」だとわかるのか、なぜ当時の一般的とは言えない「林檎」が登場するのかという疑問が残る。さらに、作者である島崎藤村は昭和 11 年、この詩を藤村文庫『早春』に収録する際、自ら改変を行っている。第三連を削除するとともに、第四連結句「こひしけれ」を「うれしけれ」と改めた。この改変は一体、何を意味するのであろうか。この改変後の作品を提示することによって、生徒は「なぜ改変したのか」という大きな謎に突き当たることであろう。この改変については先行研究においても肯定派と否定派の二つの立場に分かれており、研究者たちの中においても賛否両論がある。吉田精一を代表とする肯定派は、第三連の削除により、タイトルである「初恋」としてのバランスが整ったと考えており、三好行雄ら否定派は第三連の削除が、官能的な響きの消失であり、詩全体の奥行きの損失につながったと考えている。つまり、「初恋」という詩は専門的知見や表現の細部に目を向けると、生徒自らが問いを立ち上げられる重層的な構造をもっているといえるのである。

１　二人の関係性をめぐる謎（初対面なのか、幼馴染なのか）〈改変前〉

**【背景に関する問い】なぜ「われ」は「君」が「まだあげ初めし前髪」だとわかったのか。**

第一連の「まだあげ初めし前髪の」は、樋口一葉『たけくらべ』の「まだ結ひこめぬ前髪の」や『伊勢物語』二十三段（筒井筒）の文脈に通じている。少年が少女を一目見た瞬間に髪を結い上げたばかり（大人への変化）だと見抜けたのは、二人が初対面ではなく昨日まで髪を下ろして共に遊んでいた幼馴染だったからなのではないか。身近だった少女が急に大人びた姿で現れたからこそ、少年は意表を突かれ、ドキッとして胸をときめかせたという解釈が可能になる。

２　「林檎」のもつ象徴性と心の高まり〈改変前〉

【象徴に関する問い】**なぜ「林檎」なのか。**

第二連で少女が差し出す「林檎」は、今でこそ我々の食卓になじみ深い果物であるが、日本での栽培が開始されたのは明治時代になってからである。また、その果実の「甘酸っぱさ」は初恋のイメージに通ずるものがあるが、生徒の意識の中では林檎＝初恋という図式はあまりないようである。その林檎は、『旧約聖書』のエデンの園における「知恵の実（禁断の果実）」やギリシャ神話の文脈を背景にもち、単なる果物ではなく「恋の目覚め」や「甘い誘惑」を象徴している。少女から林檎を手渡されたことで少年は初めて恋心を意識し、甘酸っぱい喜びとともに恋心を高まらせるのである。一方、少女が自ら「やさしく」「われにあたへし」という積極的な振る舞いは、無意識（あるいは小魔的）な恋への誘い（誘惑）であり、それを受け取った少年は無垢な世界から一歩を踏み出し、戸惑いながらも甘美な切なさを胸に刻むことになる。

３　第三連の唐突さと作者による削除の謎〈改変前・改変後〉

【展開に関わる問い】**なぜ第三連を削除したのか。**

第三連の「ためいき」「恋の盃」といった急激な二人の接近や濃密な描写は、前後の連（田園風景の初々しさ）と比べるとやや唐突で大人びた印象を与える。改変前（初出時）は、この第三連が存在することで、詩全体がかつての初恋を大人になって振り返る過去の回想となるとともに、「ためいき」が髪にかかるほどの距離感となった二人の生々しさや官能的な響きという奥行きを生み出していた。しかし、藤村は後年（昭和 11 年『早春』）にこの第三連を丸ごと削除した。これは、過剰に生々しい恋の描写を削ぎ落とし、少年少女の純粋で爽やかな一瞬へと昇華させるための改変であったと考えられる。

４　結句「こひし」から「うれし」への変更の意図〈改変後〉

【言葉にこだわる問い】**なぜ「こひしけれ」を「うれしけれ」に変えたのか。**

古語「こひし」は時間的・空間的距離のある離れた対象を思う言葉であり、過去の出来事を遠くから懐かしむ大人の視点を表す。藤村が結句を「問ひたまふこそうれしけれ」へ改めたことで、離れた過去を思う回想から、目の前で自分に問いかけてくる少女に対し、リアルタイムで胸を躍らせる少年の視点へと鮮やかに切り替わっている。

これら①～④の問いを統合して読み解くと、改変後の「初恋」は、単なる「初対面の甘い恋の物語」ではなく、「われ」よりも少し早く大人びた姿を見せ、林檎（誘惑）を差し出して無意識に揺さぶってくる少女と、その変化とアプローチに翻弄されながらも一途に胸をときめかせるうぶな少年の、等身大でみずみずしい今の物語であると捉えることができる。

昨日まで同じ目線で遊んでいた幼馴染の少女が、ある日突然髪を結い上げて大人びた雰囲気を纏い（第一連）、自ら林檎を差し出して微笑みかけてくる（第二連）。少女のどこか大人びた振る舞いや誘惑に翻弄され、どう接していいか戸惑いながらも、少年は目の前の出来事としてリアルタイムに恋の深まりと歓喜をかみしめているのである。

初出時（改変前）に漂っていた大人のノスタルジックな過去の回想や濃密で成熟した恋の描写（第三連）を作者があえて削ぎ落としたからこそ、かえって少女の大人びた魅力に気おされる少年のうぶさや初々しさが鮮やかに際立つ作品へと洗練されたと言える。

このように単一の模範解答に収まらない解釈の奥行きをもつ本教材は、生徒が言葉を手がかりに自ら課題を設定し、対話を通して解釈を深める学習の素材として最適であると考える。

**（２）生徒の実態**

生徒はこれまでに「世界はうつくしいと」や「挨拶――原爆の写真によせて」等、既習教材を通

して、「表現技法（比喩・対比等）への着目」「構成・表記（行分け・連）の分析」「タイトルの意味の検討」「作者の時代背景の把握」といった観点を個別に用いながら詩を読んできている。しかし、一見平易に見える詩に対して、その言葉を書いてあるとおりの意味として固定的に捉えてしまい、言葉の選択の意図や背景にある意味まで自力で深く読み込もうとする姿勢はまだ十分とはいえない。一方で、自分なりの疑問や違和感を起点に、主体的に言葉を探究し、対話を通して納得解を導き出す学びには意欲的に取り組む姿が見られる。

**（３）指導の構え**

本単元では、研究主題である「主体性の高まりをめざす課題学習―学びの往来を通して、『自立した学習者』を育成する―」の実現に向け、改変前と改変後の印象の違いから生徒自身が問いを設定する場を設ける。単に教師から与えられた設問に答えるのではなく、「なぜ作者はこの言葉を変更したのか」「改変によって何が表現されたのか」といった改変の謎に生徒自身が言葉を手がかりにして挑む中で、個人での探究と仲間との対話（学びの往来）を深めさせたい。

そのためには、まず詩を丁寧に読ませる必要がある。しかし、本教材は文語定型詩であり、苦手意識を抱く生徒も多いと考えられる。そこで、七五調の流麗な響きをもつ本教材の特色を生かして音読させることにより、一つ一つの言葉への意識を高めたい。また、文語表現については最低限の解説にとどめ、生徒の自由な発想の妨げにならないようにしたい。教材自体は、初恋をモチーフにしており、登場人物も生徒と同年代と考えられることから、思春期の生徒には共感しやすいと考える。

また、生徒自身が問いを設定する際には、初読の感想（改変前のものと改変後のもの）を大切にさせる。教材を読む前に生徒が考える初恋のイメージを十分に膨らませておくことで、教材と対峙したときの生徒の新鮮な驚きや違和感が生まれるであろう。その感想を生かし、問いにつなげたい。さらに、普段読み流してしまうような言葉の一つ一つに注目させ、作者がその言葉を選んだ意図へ意識を向けられるようにする。言葉への意識が高まれば、必然的に「なぜその言葉を選んだのか」「なぜ選ばなかったのか」という問いが生まれ、課題につながる問いが導き出されると考える。そして、一つ一つの言葉を大切にして、言葉を根拠にして考えることで、課題が解決したり、新しい解釈を得て作品への理解が深まったりする学びを経験させたい。

このように、言葉を使って主体的に思考し判断するプロセスを通じ、詩を読む楽しさや自立的な学びの姿勢を育みたい。

## ３　研究主題・副題との関連

本単元における「自立した学習者」とは、教師から与えられた解釈をなぞる生徒ではなく、「言葉に対して言葉を使って主体的に思考・判断・表現し、自力で詩を読み解くことができる生徒」である。単に本教材の解説を理解するにとどまらず、生涯にわたって新たな詩や文学作品、さらには多種多様な文章に出会った際にも主体的に読み味わい、思考を深められる姿勢を育むことを目指す。

そのために本単元では、これまで国語の授業で育んできた読解の技能を、生徒自身が今後の学習や他領域でも自力で活用できる汎用的な学習方略として再構築し、意識化させる。

【本単元で整理する「言葉を読み解く学習方略」】※（　）内は本単元で主に意識させる時間

［方略１］言葉の意味の三層構造（辞書的意味・情意的意味・意図的意味）に目を向けて意味を深掘りする。（主に第３時、第４時）

【例】林檎

辞書的意味…甘酸っぱくて赤い果物
情意的意味…「赤くてかわいらしい」「甘酸っぱい恋の始まり」というわくわくするイメージ
意図的意味…旧約聖書の「禁断の実（知恵の実）」からとっており、「大人へと変化すること（恋の目覚め）」を表現したくて作者がわざわざ選んだと言えるのではないか

［方略２］言語形式（表現の工夫・改変）と言語内容（心理・情景）を往復させて作者の意図に迫る。（主に第３時、第４時）

【例】
形式（「こひしけれ」から「うれしけれ」に変えている）
↓
内容（「こひし」は離れた過去を思う意味で、「うれし」は目の前の出来事に使う。つまり、目の前のリアルタイムの喜びに変わったということではないか）
↓
形式（では、第３連をなくしたのも、大人の回想ではなく、少年のさわやかな現在の「初恋」を強調したかったからではないか）

［方略３］既習の鑑賞・読解観点（技法・タイトル・背景）を統合し、「言葉の違和感や不整合」から探究すべき問いを立ち上げる。（主に第１時、第２時）

［方略４］他者との対話や初発の読みとの比較（学びの往来）を通して自身の解釈を検証し、納得解へと自己調整・再構築する。（主に第４時、第５時）

これらの学習方略は、本教材である詩の鑑賞にとどまらず、小説の読解や論理的な文章の追究、日常の言語生活にも広く適用できる国語科の汎用的な学び方である。本単元では、改変前後の「初恋」という重層的なテキストを素材として、生徒が「言葉の意味の三層構造（辞書的意味・情意的意味・作者の意図的意味）」に着目し、「言語形式と言語内容の往復思考」を重ねることで、言葉の選択の理由や作者の表現意図に迫る思考力を育てる。さらに、「個と協働の往来（対話による解釈の検証）」「今の自分と過去の自分の往来（初発の感想からの変容の省察）」という学習過程を仕組むことで、思考の深まりを自己モニタリングさせ、自立した学習者へと導く。

## ４　単元の目標

○　七五調のリズム、同語反復、「林檎」等の語句がもつ象徴的意味（三層構造）や、作者による改変前後の表現上の特徴を理解できる。【知識及び技能】
◎　言葉を読み解く学習方略（言語形式と内容の往復等）を活用して自ら課題を設定し、言葉を根拠に登場人物の関係性や作品の世界観、改変の意図を多角的に考察できる。【思考力、判断力、表現力等】
○　言葉を手がかりに主体的・協働的に解釈の深まりを追究し、自らの読みの変容を省察しながら、生涯にわたって詩を味読しようとする。【学びに向かう力、人間性等】

## ５　全体計画（全５時間）

第１時：改変前の作品を通読し、言葉を読み解く学習方略を意識させながら解釈する。
七五調のリズムを感じて朗読し、既習の鑑賞観点を適用しながら読んだ上で、詩を解釈

する。また、生徒自身が「初恋」というタイトルからイメージしていた詩の内容とのずれや違和感から、詩に対する疑問点を出させる。

第２時：改変後の作品を提示し、改変前の作品の解釈と比較したときの違和感から疑問点（改変の謎）を出させ、整理する。

　第三連の削除と、結句を「こひしけれ」から「うれしけれ」に改めた点に注目させ、改変の謎を整理するとともに、第１時での疑問点も併せ、本時の課題に迫るための課題を整理・設定する。

第３時：課題を追究する。

　改変前後の比較やキーワードの背景（『伊勢物語』『たけくらべ』、林檎の象徴性等）を手がかりに、言語形式と言語内容を往復させながら、二人の関係や改変の意図（過去の回想か、現在のときめきか）を自力追究および小グループ対話で考察する。

第４時：各自追究した課題の結論を統合し、本時の課題に迫る。（本時）

　それぞれが導き出した結論を出し合い、構造的に位置付けられた板書により、作品の世界観や作者の改変意図を理解する。

第５時：「初恋」の批評文を書き、交流する。

　改変前と改変後の作品を比べてどちらがよいと考えるか、詩の言葉や表現を根拠とし、その理由を文章にまとめる。まとめた文章を読み合い、意見交流する。

## ６　本時の学習（４／５時間）

### （１）指導目標

・改変前後の言葉の違い（第三連の有無／「こひし」と「うれし」）や背景について、言葉を読み解く学習方略（言語形式と内容の往復、意味の三層構造）を活用して考察した結果を話合い、改変後の詩を多角的に捉え、作者の改変意図を理解できるようにする。

・言葉を手がかりに主体的・協働的に解釈の深まりを追究し、自らの読みの変容を省察しながら、詩を味読しようとする態度を養う。

### （２）展開

| 学習活動と予想される生徒の反応 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| １　課題を確認する。 | ・前時の課題をつなぎ合わせ、本時の課題に迫ることを押さえる。 |
| 改変されたことによって、「初恋」はどのような作品になったと言えるだろうか | |
| ２　前時に追究したそれぞれの課題の考察結果を発表する。<br>【二人の関係性をめぐる謎】<br>○「前髪をあげる」背景として、『たけくらべ』や『伊勢物語』の筒井筒から、二人の関係は幼馴染だと想像できる。<br>○少女は少年より一足先に大人に近づいたのではないか。<br>【「林檎」を登場させた謎】<br>○林檎の白い花の可憐さや果実の甘酸っぱさが少女や恋に通ずる。<br>○「旧約聖書」やギリシャ神話では、林 | ・課題の結論が相互に作用することによって、課題が徐々に解決していくように、意図的指名をする。<br><br>・発言内容を板書に可視化・整理し、解釈の奥行きを整理する。 |

| | |
|---|---|
| 檎は「禁断の知恵の実」や「誘惑」のイメージがある。<br>【第三連削除の謎】<br>○第三連がないことで、二人の距離の密着や濃密な関係性、大人っぽさがなくなる。<br>○恋が成就した描写がなくなる。<br>【「こひし」から「うれし」への変更の謎】<br>○「こひし」には離れた場所・過去を慈しむという意味があり、「うれし」には目の前の現在を喜ぶという意味がある。 | |
| 3　課題の考察結果をもとに、改変した作者の意図について話し合う。<br>○幼馴染だからこそ、急に大人っぽくなった髪型（あげ初めし）に気付けたんだと思う。<br>○今まで子供だと思っていた幼なじみが、急に大人ぽくなってどきっとしたのではないか。<br>○第三連があると『二人の深まる恋心や過去の甘美な回想』に見えるが、消すと『少年の爽やかな今』になる。<br>○第三連が削除されたことで、初々しく清らかな初恋が描かれる。<br>○藤村は初め『かつての初恋を思う大人の視点』で書き、後から『初々しい少年の現在の視点』へ改変したのではないか。<br>○「林檎」の「誘惑」の意味を考えると、大人になった少女に翻弄される少年の姿が想像でき、少年の純朴さが際立つ。<br>○第三連の「恋の成就」がないから、少年の純真無垢な片思いかもしれない。「林檎」と考え併せると少年は少女にもてあそばれている？<br>○このあとの展開として、少年の初恋は実るのか、実らないのか気になる。 | ・生徒の発言を萎縮させないように、詩の解釈の正解は一つではなく、言葉を根拠とした多様な読みの可能性を許容する姿勢をもつ。<br><br>・解釈の根拠となる詩中の言葉を問い返すことで、言葉の意味の三層構造や言語形式と言語内容との往復等の言葉を読み解く学習方略を意識させる。 |
| 4　話合いをもとに、課題についての考えを自分の言葉でまとめ、全体で共有する。<br>○大人びた少女の誘惑に翻弄されながらも、一途に胸をときめかせるうぶな少年の、等身大でみずみずしい「今」の物語を描く作品である。<br>○大人の回想や濃密な描写を削ぎ落としたからこそ、初々しいときめきそのものが鮮明 | ・これまでの話合いをもとに、「初恋」という作品全体について考えるよう促す。<br><br>学習評価の観点<br>言葉を読み解く学習方略を活用し、改変前後の言葉の違いや背景から、改変後の詩を多角的に捉え、作者の改変意図を考察している。【思考・判断・表現】（発言・ワークシート） |

| | |
|---|---|
| に浮き上がる。「初恋」というタイトルにふさわしい作品と言える。<br><br>5　本時の振り返りを書く。 | ・言葉を読み解く学習方略を使ったことで自分の考えが深まったかどうかを意識的に記述させる。 |

**（3）学習評価の観点**

・言葉を読み解く学習方略を活用し、改変前後の言葉の違いや背景から、改変後の詩を多角的に捉え、作者の改変意図を考察している。【思考・判断・表現】（発言・ワークシート）

・言葉を手がかりに主体的・協働的に解釈の深まりを追究し、自らの読みの変容を省察しながら、詩を味読しようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】（ワークシート・観察）

**評価規準（ルーブリック）**

| 評価規準 | A | B | C |
|---|---|---|---|
| 言葉を読み解く学習方略を活用し、改変前後の言葉の違いや背景に着目し、言葉を根拠に作品の世界観や改変の意図を考察している。 | ① 言葉を読み解く学習方略（三層構造・往復思考）を活用している。<br>② 改変前後の言葉の違い（第三連・結句）や背景（知恵の実・筒井筒）に着目し、具体的な言葉や表現形式を明確な根拠として、作品の世界観や改変の意図を多面的・多角的に考察している。 | ①言葉を読み解く学習方略を活用している。<br>②改変前後の言葉の違いや背景に着目し、言葉を根拠にして作品の世界観や改変の意図を考察している。 | Bのいずれかが不足している。（言葉を根拠としておらず、直感や印象のみで記述している。） |

**7　授業観察の視点**

・改変後の詩を提示したことは、詩の言葉の一つ一つに目を向けさせ、「初恋」の世界観を捉えさせる上で有効であったか。

・自立した学習者の育成のために、言葉を読み解く学習方略を整理し、生徒に意識させたことは有効であったか。

**〔主な参考文献〕**


・河合さやか「島崎藤村『初恋』をめぐって－背景・表現・解釈－」2013 年度名古屋大学学生論文コンテスト

・陳知清「島崎藤村『初恋』の教材的価値」東京学芸大学　学校教育学研究論文集　第 44 号　2021 年

・吉田精一『吉田精一著作集６』1981 年　桜楓社

・三好行雄他『新潮日本文学アルバム　島崎藤村』1984 年　新潮社

・井出孫六他『群像日本の作家　島崎藤村』1992 年　小学館

・『日本近代文学大系 15　藤村詩集』1971 年　角川書店